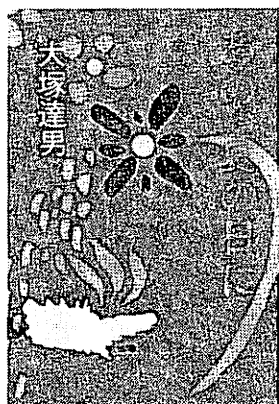


「図書紹介」

大塚達男著

『あの、夏の日』

高橋武昌



大塚さんとの出会い

(汐文社 一三〇〇円)

私が民教運動に入ったのは古志郡の僻地校であった。となり村の小学校で精力的に教育運動をすすめていた河合増久さん(新潟県教育研究協議会副会長)が、しばしば訪れて鮮烈な民主教育の情報を

届けてくれたことに私は心よせていた。

まず私は作文の会に属し教育実践をすすめた。第21回作文教育研究大会が新潟で開かれた。生活指導と作文分科会でレポーターとなり始めて多くの実践家の前で大変緊張して報告した内容は今でも記憶している。そして、大塚達男さんとの出会い。大会のために何回も足をはこばれ精力的に活躍なさる先生に「がんばってますか。」と声をかけられ、励まされ私も、大会の為の末端の活動に加わった。古志・作文教育、大塚先生、教育運動はつながりを持ち私を導いてくれたひとつみただ。その大塚先生の若き日の一ページをこの小説の中にかいま見た気がした。大塚先生の自伝的小説をいま、私の若い教師時代(新卒数年間は、文部省の特活研究に寄与?)から民主教育運動に導かれる軌跡を思いおこしながら一気に感動をもって読んだ。

第一章 ヒラメとスッポン

第二章 ゆれるサークル

大塚先生の若き日は小野一先生(代用

教員)で再現される。小野は古志の中学校で生活綴方が楽しくてたまらない若き熱血教師。小野は、教育の原点を子ども・その生活と生産の地域に求め、職場と生活綴方サークルに依拠して実践をすすめている。

生徒に、「どうして、自分の家は貧乏なんだ」ときかれとまどう小野。「よし、先生も勉強してみる」と子どもを励まし共に育つ姿勢は、印象的。また、職場も、新潟県の学園体制の中にくみこまれた教員人事であり、ヒラメ教師と子どもを見つめる教師が織りなす職員のやりとりは、今も変わらない。人間として教師としてサークルで鍛えられ成長していく小野と仲間たちの個性を明確に描きわけている。彼らの文集と名簿を警察に売る職場の管理職と駐在のやりとりも興味深い。改めて権力の末端がどのように職場や地域に入りこみ情報を得ているかを思いおこさせる。事件はここに始まる。

第三章 疎開の悪ガキ

職場のお京先生は、小野の恋人。その

無骨なやりとり交際の中に暖かいものが伝わる。小野に「アカ、か。」とせまるお京先生。「アカのレットテルをはるのは、思想統制のはじまりで反共は戦争への道だ。」と説く小野。

又、若きエネルギーにみちた生活綴方教師たちは地域に根をおろす。青年団活動も小野は当然大切にしている。ぐれた健をチンピラ仲間から立ちなおすくんだり小野のぐれた青年期の教訓が二重にうつり迫力がある。

一方、いよいよ思想調査事件はマスコミにとりあげられる。

第四章 逃げて道はない

この章より私は、すわりなおして読みすすめた。

職場での能力別クラス編成を論議する場面がある。現在、新指導要領のなかみを職場で子どもの発達とかかわって論議する姿は、そう多くはないと思う。そして、いよいよ思想調査事件は、県警本部田辺警備課長との交渉へと動く。県教組執行部も力になってくれる。

時代に生きる子ども、教師も政治のまっただ中に、おかれている。一九四九年の教職員のレッドバージを皮切りに戦後の対日政策の変換（軍事化・反共化・反動化）は、嵐のように吹きすさぶ。新潟県のレッドバージは、新潟大学の教官7名、そして小中学校の教師21名の職場追放から始まる。本著は、大塚先生という戦後民主教育運動の実践、研究家の自伝的小説の形をとりながら、同時代の教育運動はもとより、労働運動や政治の状況を語っている点は、じっくり読みなおす意味がある。嵐の中で、教師は人間としていかに生きるか」ということが今ほど求められる時はない。

第五章 対峙、そして出発

思想調査事件はいよいよ大詰め。小野たちは県庁におもむく。小野は「あなたは、元特高だ／寒川とみ子さんを知っているだろ。戦前に綴方を弾圧し、寒川夫人を検挙して取調べた。そしてまた、綴方の俺たちを……謝罪しろ／」と爆発する。会場は騒然となる……

本書二二六ページから日本の労働運動の足あとを紹介している。新潟県教組山名執行部は新潟県のレッドバージでは先頭になって闘い、県民と大衆に依拠した運動がいかに嵐の時代には必要か教えている。又、当時の日教組執行部内で多数を占める荒木委員長は動揺していた。新潟県のレッドバージの反けきの中で、掘部教育長交渉で、同席した日教組荒木委員長派の書記次長が「はやく切ってしまおう。」と発言した。教育長が「日教組はだらしがない」と諷める話は忘れられない。

「中部作文サークル」研究集会が、小野の学校で開かれるのは、県警の思想調査事件についての回答のたあとであった。小野は、実践研究を提案するので落付かない。お京先生は、生徒と共に開会に「仕事の歌」をうたう準備に忙しい。

（高橋 武昌＝南中野山小学校）